法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

ルネサンスのカバラ的『創世記』註解 : ピーコ・デッラ・ミランドーラの『ヘプタプルス』における“In principio”の解釈

TAGUCHI, Seiichi / 田口, 清一

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / 経済志林
(巻 / Volume)
78
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
377
(終了ページ / End Page)
389
(発行年 / Year)
2011-02-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007129

【研究ノート】

ルネサンスのカバラ的『創世記』註解：ピーコ•デッラ•ミランドーラの『ヘプタプルス』における“In principio”の解釈※

田　口　清　一

ユダヤ神秘主義として知られるカバラ[1]は，ルネサンス的錯綜のレトルトの中で初めてキリスト教と融合し，「キリスト教カバラ」[2]という一見矛盾した混淆思想となって結晶した。この「キリスト教化された」カバラは15世紀後半のイタリアに端を発し，マルシリオ・フィチーノがラテン語訳した『ヘルメス文書』（*Corpus Hermeticum*）が大いに流布した[3]ことと相俟ってヘルメス思想とも合体し，「ヘルメス•カバラ主義」という様相を帯び，続く16・17世紀に一大旋風を巻き起こし，ルネサンス思想に多大な影響を及ぼすこととなった。

このキリスト教カバラをもたらした人物，換言すれば，西欧思想に初めてユダヤ教のカバラを導入した人物がジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドーラ（1463－1494）である。北イタリアのモデナ近郊のミランドーラ＝コンコルディア伯の家に生まれ，早熟だったピーコは，14歳の時にボローニャで教会法を学び始めたが満足できなかったようである。その２年後の1479年にはフェッラーラで哲学を研究し始め，1480年から1482年の間は，当時のアリストテレス主義の中心地の一つであったパドヴァに赴き，ここでユダヤ人哲学者エリヤー・デル・メディゴの指導を受けた。この時期に各地で様々な人文主義学者と接触をもったが，特にフィレンツェには足繁く赴き，フィチーノの主宰するアカデミア・プラトニカ（Academia

Platonica）[4] に加わった。その後1486年にペルージャに赴くが，ここでミトリダテスを初めとするユダヤ人学者の指導の下，ヘブライ語とアラビア語を研究した[5]。伝説によれば，ピーコは1480年代初頭にモーセス・デ・レオンの『ゾーハル』の写本を目にし，忽ちカバラ思想に夢中になったと言われている[6]。だが，これはあくまで伝説であり，実際にはペルージャ滞在中にカバラへの強い関心が芽生えたものと思われる。

1492年にユダヤ人がスペインから追放されたのは有名だが，これ以前にもカトリック教会による迫害から逃れるため多くのユダヤ人がスペインからイタリアに移住しており，ミトリダテスもその一人だった。だが，このおかげで，ピーコはミトリダテスから直接カバラを学ぶことができ，キリスト教思想とユダヤ神秘思想の融合がもたらされたのである。

ピーコ及び後のルネサンス・カバラ主義者は，カバラが直接モーセに遡る古代ヘブライの叡智に属すものと確信していたが，彼らのキリスト教カバラは，実際には中世のスペインで発展した体系に基づいていたのだ。中世以降のカバラ思想の典拠となる主要文献は，２世紀から６世紀の間に書かれており，初期カバラの最重要経典と言うべき『セーフェル・イェツィラー』（*Sefer Yetzirah*,『創造の書』）の成立年代も３～６世紀の間と考えられている[7]。その後12世紀後半以降，プロヴァンスとスペイン（特に13世紀のスペイン）を中心に次第に精緻な神智学的体系へと発展し，極めて複雑で理解困難なものとなっていたのである[8]。

ピーコの思想[9] は，ルネサンス的シンクレティズムの典型とも言うべきもので，過去の多種多様な思想を調和の内に綜合しようとするものである。かような特徴が顕著に表れているのが，ローマで公開討論を行うために書かれた900の『論題』（*Conclusiones*, 1486）である[10]。これは過去のあらゆる思想に言及しており，彼の広範な関心と共に，綜合への並々ならぬ熱意が感じられる著作である。900のテーゼは，過去の思想から直接導かれたものと，ピーコ自身の見解によるものの二種に大別される。そして，カバラに関するものは双方に含まれており，前者には47，後者には72のカバラに

関する論題が提示されている。自身の見解による後者は,「ヘブライの叡智の基盤によってキリスト教を確固たらしめる」（ex ipsis Hebraeorum sapientum fundamentis Christianam religionem maxime confirmantes）[11] ものとして導入されている。この文言に，ピーコにとって，カバラがキリスト教と相容れるものであることが端的に窺われよう。

この72のテーゼの最初のものにおいてピーコは，カバラには思弁的なものと実践的なものの二種が存在することを述べている[12]。次の第二テーゼでは, 前者即ち「思弁的カバラ」（speculativa Cabala）を更に四つに細分しており,「第一のものは，筆者が回転する文字の学問と呼ぶものであり，筆者が普遍的哲学と呼んでいる哲学に対応するものである。第二，第三，第四のものは，三重の天の車（メルカーバー）であり，各々，神（界），中間界，感覚界の本質に関する哲学に対応するものである」[13] としている。続く第三テーゼでは,「実践的カバラ」（practica Cabala）の定義を与えており,「カバラの実践的部分である学問は，形式的形而上学と下位の神学を全て実践するもの」[14] としている。

後の『弁明』（*Apologia*,1487）[15] においては，思弁的カバラの細分は行なっておらず, 二種にだけ分けている。一つは「結合術」（ars combinandi）と呼ばれており，これは『論題』において回転する文字の学問と呼ばれ，普遍的哲学に対応したものである[16]。この「結合術」は，恐らく13世紀のスペインのカバラ学者アブラハム・アブラフィアの神秘的文字結合術に由来するものと思われるが，ピーコはこれを「ルルスの術」（ars Raymundi）[17] と類似したものとしているが，実際には両者は異質のものである[18]。今一つは『論題』において実践的カバラと呼んだものだが，ここでは「自然魔術の至高の部分」（pars Magiae naturalis suprema）とされている[19]。

ピーコの著作の中で最もカバラ的色彩が濃いものは，1489年に執筆された『ヘプタプルス』（*Heptaplus*）[20] である。尤も，本論に当たる全７章においてはカバラへの言及は回避されているが，[21] 最後に付加された『創世記』の第一句に対する註解は，カバラへの直接的な言及はないにせよ，そ

の方法は明らかにカバラ的である。『ヘプタプルス』は「創造の6日間に関する7重の註解」（de septiformi sex dierum geneseos enarratione）[22] とされ，カバラ的手法による『創世記』第1章の註解となっており，全体の構成は以下のとおりである。

① 元素界について（De mundo elementari）
② 天界について（De mundo coelesti）
③ 天使と不可視の世界について（De mundo angelico et invisibili）
④ 人間界，即ち人間の本性について（De mundo humano, id est, de hominis natura）
⑤ 全世界について（De omnibus mundis）
⑥ 諸世界間と万物の親近性について（De mundorum inter se et rerum omnium cognatione）
⑦ 永遠なる生である至福について（De felicitate quae est vita aeterna）
⑧ 第一句，即ち「初めに」（In principio）の註解（Expositio primae dictionis, id est, In principio）

本稿は，最後の⑧の『創世記』の最初の一句に対する註解の主要部分を訳出して紹介することにより，ピーコの，延いてはルネサンスのカバラ思想の一端を窺おうとするものだが，その前にカバラの基本思想と手法について簡単に触れておくことにする。

カバラ思想の根本は，22のヘブライ文字の神秘的意味と10の〈セフィロト〉（sephiroth）の教義にある[23]。

〈セフィロト〉の教義は，『セーフェル・イェツィラー』に表れるものであり，13世紀にスペインで書かれたと思われる『ゾーハル（の書）』（*Zohar*，『光輝（の書）』）においても終始言及されている。『セーフェル・イェツィラー』においては，10の〈セフィロト〉は原初の10数として考えられている。また，空間の6つの次元，時間の2つの次元，善と悪という2つの次元を合わせた宇宙の10の無限の次元と同一視されている[24]。ショーレムによれば，〈セフィロト〉とは神に最も共通した10の名であり，その全体にお

いて「神」という一つの大いなる名を形成しているものである。また,〈セフィロト〉は神が世界を創造するための名であり,被造物としての世界は,神の内に生きているこれらの名の持つ力の外的展開なのである[25)]。このような〈セフィロト〉の教義は，当然のことながら宇宙論と結びつくものであり，10の〈セフィロト〉は宇宙の10の天空と関係している[26)]。

〈セフィロト〉と並んで今一つのカバラの根本教義であるヘブライ語の22文字に関する教義は，各文字の持つ数秘学的意味と文字操作の手法に基づいている。カバラ主義者にとってヘブライ文字は，神の名を包含したものと見做され，各々の文字は宇宙の根源的な霊的本質と神による創造の言葉を反映するものとされる[27)]。カバラ主義者は，神の名の構成分子としてのヘブライ文字とその形態を観想することにより，神自身とその名の力を通しての創造の御業を観想できるものと確信していたのであろう[28)]。

カバラという学問が，ヘブライ語聖書（特にモーセ五書）を一種の暗号と見做し，それを解読することにより，神によって隠された奥義を発見しようとするものであるとするならば，22のヘブライ文字の操作法は極めて重要な意義を有することになる。カバラ的文字操作の主要な方法としては，ゲマトリア（gematria），ノタリコン（notarikon），テムラー（themurah）がある。ゲマトリアとは「文字数秘学」とでも言うべきもので，ヘブライ語の各文字の持つ数値を利用して様々な操作を施すものである。典型的には，ある語に用いられる文字の数値を合計し，それと同じ数値になる他の語と置換するといった方法をとる。ヘブライ語に限らず，新約聖書の言語であるギリシア語においても各文字は数字としても用いられていたので，こうした数秘学的手法が可能となったのである[29)]。次のノタリコンとは，ある語が別の複数の語の頭文字から成立していると考え，その一語の中にもっと深大な意味を見出そうとするものである。最後のテムラーとは一種のアナグラムであり，ある語を構成する文字を並べ替えることにより別の語に置換したり，幾通りもの並べ替えにより一つの文にするといった操作である。数秘学的解釈の一例として，ピーコの『論題』の一つを挙げてお

く。「ヘブライのカバラ智者の秘義に従った47のカバラの論題」（Conclusiones Cabalistice numero 47, secundum secretam doctrinam sapientum Hebraeorum Cabalistarum）の第15テーゼに次のものがある。

「アブラム（Abram）の名に *H*（ヘー）という文字が加えられなかったならば，アブラハム（Abraham）は子をもうけることはなかっただろう。」[30)]

ヘブライ語の五番目の文字である“*H*”は，数としては５として用いられる。ピュタゴラス以来，「５」は生命と愛を，延いては結婚を象徴する数であり，[31)] カバラにおいても生殖を表わす文字であるため，Abramという名に“*h*”を加えてAbra*h*amとしたので，100歳の高齢で子をもうけることができたと解釈するのである[32)]。これは，ルネサンスにおいて最も広く流布していたカバラ的常套手段の一つに思われる[33)]。

以下に訳出する『ヘプタプルス』の最終部には，テムラー的手法にノタリコンを絡めた解読法が看取できるであろう。全文の内，最初の３分の１程は割愛し，カバラ的手法が駆使される残りの部分を全訳する[34)]。

「第一句，『初めに』についての註解」

前略。

古代（ヘブライ）人の法則を聖書の第一句―ヘブライ人は“*Beresit*”と，我々は“*In principio*”と読み取るもの―に適用し，筆者にも何か知る価値のあることを解明できぬものかどうかを確かめてみたかった。期待を遥かに超えて，筆者自身にもそのままでは信じられないような，他人には容易に信じがたいようなことを発見したのだ。即ち，世界とそこに宿る万物の創造の計画が，かの一句に明らかに示されていることを。

筆者は，未だ嘗て聞いたことがないような，信じがたい驚嘆すべきことを語っているのだ。だが，注意を払えば，読者諸氏もすぐに信じられるだろうし，明かされた事実そのものが筆者の正しさを証明してくれよう。

ヘブライ人の間では，この一句は*berescith*と書かれる。ここから，３番目の文字を最初の文字に連結すると，*ab* という語が生じる。最初の文字を

二つ重ねたものに2番目の文字を付加すると，*bebar* という語が得られる。最初の文字だけを除いて他の全ての文字を読むと，*resith* が得られる。最初と最後の文字に4番目の文字を連結すると，*sciabat* が得られる。最初の3文字をその順番のままに並べると，*bara* が得られる。最初の文字を落として次の3文字を取ると，*rosc* が得られる。最初と2番目を落として次の2文字を取ると，es が得られる。最初の3文字を落として4番目と5番目を取ると，*seth* が得られる。更に，最初の文字に2番目の文字を連結すると，*rab* が得られる。3番目の文字の後に4番目と5番目を置くと，*hisc* が得られる。最後の2文字に最初の2文字を連結すると，*berith* が得られる。最初の文字に最後の文字を加えると，最後の12個目の *thob* という語が得られる。この場合 *thau* が *theth* に転換しているが，これはヘブライ語ではごく普通に起こることである。

先ず初めに，これらの言葉がラテン語では如何なる意味になるのかを，次いで，哲学に無知でない人々に自然界全体の如何なる神秘を明かしているのかを見てみよう。*ab* は「父」を，*bebar* は「子において」及び「子を通して」を意味する（*beth* という接頭辞は両方の意味を表わすからである）。*resith* は「初め」を，*sciabath* は「安息と終り」を，*bara* は「創造した」を，*rosc* は「頭」を，*es* は「火」を，*seth* は「基礎」を，*rab* は「偉大なものの」を，*hisc* は「人間の」を，*berit* は「契約によって」を，*thob* は「善きことによって」を各々意味する。全体をこの順番通りに構成すると次のようになるだろう[35]。「父は，初めにして終り即ち安息である子において，また子を通して，善き契約によって大いなる人間の頭と火と基礎を創造した」。（Pater in filio, et per filium principium et finem, sive quietem creavit, caput, ignem et fundamentum magni hominis, foedere bono）この一節全体は，かの最初の一句を分解して構成した結果得られたものである。

この一節の意味がどれほど深遠であらゆる学識に満ち溢れたものであるかは，万人にとって決して明白ではない。だが，これらの語句が持つ意味の少なくとも一部は―たとえ全部ではないにせよ―，万人にとって明らか

である。キリスト教徒なら誰しも，父が子において，及び子を通して創造したという言が何を意味するものか分かっている。同様に，子が万物の初めにして終りであるというのが何を言わんとしているのかも分かっている。（ヨハネが書いているように[36]），子はα（アルファ）にしてω（オメガ）であり，子は自ら初めと称しているからだ。また，我々は既に子が万物の終りであり，そこにおいて万物は初めへと回帰することを示してきた。残りの部分は多少意味が分かりにくい。即ち，大いなる人間の頭，火，基礎とは何を言わんとしているのか。契約とは何であり，なぜ善きものと言われるのか。前章までに論じてきた四つの世界の計画，関係，最後に論じた至福の全てが，この一節に余すところなく明かされていることを直ちに看取するのは，万人にとって容易なことではない。それゆえ，最初に，世界はモーセが「大いなる人間」と呼ぶものであることに気づくべきである。人間が小さき世界であるならば，確かに世界は大いなる人間であるのだから。

この機を捉えて，いみじくもモーセは，叡智界，天界，必滅界の三世界を人間の三つの部位で表わしており，このメタファーにより，全世界は人間の内に含まれていることを示唆しているだけではなく，人間のどの部位がどの世界に対応しているのかも簡潔に示している。

それゆえに，人間の三部位を考えてみよう。最上位の部位が頭部であり，次に首から臍まで伸びている部位があり，三番目に臍から足の先まで伸びている部位がある。人間の形姿のこの三つの部位は，一定の相違によって分割され区分されている。だが，この三部位が世界の三つの部分と，これ以上ないほど厳密に，実に美しく実に完璧に対応しているのは驚嘆に値することである。

頭部には知識の源泉である脳がある。胸部には運動と生命と熱の源泉である心臓がある。最下部には生成原理である生殖器がある。同様に，世界においては，天使界＝叡智界である最高部は知識の源泉である。なぜなら，その本質は理解のためにあるのだから。中間部である天界は，生命と生成と熱の原理であり，そこでは，心臓が胸部を支配するように，太陽が支配

している。誰もが知っているように，月下界には，生成と腐敗の原理がある。世界と人間のこれら各部が皆，実に正確に相互対応していることが分かるだろう。モーセは，第一の部分を頭という固有の名で表わしたが，第二の部分を火と呼んでいるのは，この名によって多くの人は天空を指すからであると共に，人間においてこの部位は熱の原理でもあるからだ。第三の部分を基礎と呼んでいるのは，（誰もが知っているように）人体全体はこの部分を根源とし，この部分によって支えられているためである。モーセが神は善き契約によってこれらを創造したと付け加えているのは，神の叡智により，各部分の性質の親近性と相互の一致に基づいて，各部の間に平和的で友好的な契約が定められたからである。従ってこの契約は善きものである。なぜなら，世界が全体として一つであるのと同様に，最終的には世界がその造り主と一体となるように，善そのものである神へと向かい導かれる契約だからである。

我々も世界の聖なる契約に倣おうではないか。それにより，皆が相互の愛によって一体となれるように。また，神の真の愛を通して，至福の内に神と一体化できるように[37)]。

以上に訳出した註解の中に，テムラーとノタリコンの手法がはっきりと現れていよう。そして，最終部分からは，ルネサンスという知的運動の一つの象徴とも言うべき「宇宙の全一性」，「全即一」という思想が窺えるのである。これは，ルネサンス的綜合の典型であるピーコの思想と正に合致するものであった。

【註】

※本稿では，ヘブライ文字は全てローマ字に転換して表記することをお断りしておく。その際，ヘブライ語では符号によって示される母音を補って表記してある。

〈注〉

1）ヘブライ語の〈カッバーラー（qabbalah）〉という語は，元来は単に「伝承」を意味する語であったが，これが神秘主義的・秘教的伝統を表わすようになったのは12世紀後半以降である。ロラン・ゲッチェル『カバラ』田中義廣訳（白水社文庫クセジュ，1999年），5－6頁参照。

2）ルネサンスのキリスト教カバラについては以下を参照。J. L. Blau, *The Christian Interpretation of the Cabala in the Renaissance*, New York, 1944; F. Secret, Les *Kabbalistes chretiens de la Renaissance*, Paris, 1964; M. Idel, "The Magical and Neoplatonic Interpretation of the Kabbalah in the Renaissance", in *Jewish Thought in the Sixteenth Century*, ed. B. D. Cooperman, Harvard University Press, 1983; P. Beitchman, *Alchemy of the Word: Cabala of the Renaissance*, State University of New York Press, 1998.

3）フィチーノがラテン語訳した『ヘルメス文書』はルネサンスにおいて彼の他の著作よりも普及し，16世紀末までには少なくとも16版を重ねている。cf. P. O. Kristeller, *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma, 1956, pp. 223; F. A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, London, 1964（以下，Brunoと略記），p.17; W. Shumaker, *The Occult Sciences in the Renaissance*, California, 1972, pp. 201-202（ウェイン・シューメーカー『ルネサンスのオカルト学』田口清一訳，平凡社，1987年，298－299頁）.

4）アカデミア・プラトニカについては，Della Tore, *Storia dell' Academia Platonica di Firenze*, Firenze, 1902を参照。

5）ピーコの生涯については，E. Garin, *Giovanni Pico della Mirandola－vita e dottrina－*, Firenze, 1937 に詳しい。また，J. Jacobelli, *Pico della Mirandola*, Milano, 1986も有益である。

6）cf. Beitchman, *op. cit*., p.65.

7）『セーフェル・イェツィラー』の成立年代と後世における流布については，Aryeh Kaplan, *Sefer Yetzirah: The Book of Creation*, Maine, 1997, pp.ix-xxvi; ゲッチェル，前掲書，56－58頁を参照。

8）カバラの歴史的考察に関しては，G. Scholem, *Major Trends in Jewish Mysticism*, Jerusalem, 1941（ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』山下肇，石丸昭二，井ノ川清，西脇征嘉訳，法政大学出版局，1985年）；ヨセフ・ダン「ユダヤ神秘主義―歴史的概観」市川裕訳，『岩波講座：東洋思想―ユダヤ思想２』（1988年）所収を参照。

9）ピーコの思想の全体像に関しては以下を参照。Garin, *op. cit*.; W. G.

Craven, *Giovanni Pico della Mirandola: Symbol of His Age*, Genève, 1981; F. Lelli, “Pico della Mirandola”, in *Dictionary of Gnosis and Western esotericism*, ed. W. J. Hanegraaff, et al., Leiden, 2006, pp.949-954. また，ピーコの生誕500年と没後500年を記念して開かれた以下の国際会議の報告集は，様々なトピックに関する多様な論考が収録されており，非常に有益である。*L'opera e il pensiero di Giovanni Pico della Mirandola nella storia dell'umanesimo*, Firenze, 1965 (2vols.); *Giovanni Pico della Mirandola: Convegno internazionale di studi nel cinquecentesimo anniversario della morte (1494-1994)*, ed. G. C. Garfagnini, Firenze, 1997（2vols.）. 尚，ピーコとカバラの関係に焦点を当てたものとしては以下が優れている。E. Anagnine, *Giovanni Pico della Mirandola: Sincretismo religioso-filosofico*, Bari, 1937; C. Wirszubski, *Pico della Mirandola's Encounter with Jewish Mysticism*, Harvard University Press, 1989.

10）Johannes Picus Mirandulanus, *Opera omnia*, Basel, 1572（ristampa anastatica, Torino, 1971）, pp.63-113. 以下，*Opera*と略記。現代の校訂版テクストとしては以下がある。*Conclusiones sive Theses DCCCC*, ed. B. Kieszkowski, Genève, 1973; *Conclusiones nongentae: Le novecento Tesi dell' anno 1486*, ed. A.Biondi, Firenze, 1995（羅伊対訳版）; *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses (1486)*, ed. S. A. Farmer, Arizona, 1998（羅英対訳版）.

11）Pico, *Opera*, p.107.

12）*Ibid*., pp.107-108.

13）*Ibid*., p.108; “ Prima est scientia quam ego voco Alphabetariae revolutionis, correspondentem parti philosophiae, quam ego philosophiam catholicam voco. Secunda, tertia, et quarta pars est triplex Merchiana, correspondentes triplici philosophiae particularis, de divinis, de mediis et sensibilibus naturaris.”

14）*Ibid*., p.108; “Scientia quae est pars practica Cabalae, practicat totam metaphysicam formarem et theologiam inferiorem.”

15）*Ibid*., pp.114-240.

16）*Ibid*., p.180.

17）「ルルスの術」については以下を参照。F. A. Yates, “The Art of Ramon Lull: An Approach to it through Lull's Theory of the Elements” in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, XVII, 1954, pp.115-173; eadem, Ramon Lull and John Scotus Erigena, in *Journal of the Warburg and Courtauld*

Institutes, XXIII, 1960, pp.1-44; eadem, *The Art of Memory*, London, 1966, pp.173-198; P. Rossi, "The Legacy of Ramon Lull in the 16th Century Thought", in *Medieval and Renaissance Studies*, V, 1961, pp.182-213.

18）cf. Yates, *Bruno*, p.96. 何よりも，アブラフィアの結合術がヘブライ文字による真正カバラであるのに対し，ルルスのものはラテン文字（ローマ字）を使用している。

19）Pico, *Opera*, p.181.

20）*Ibid*., pp.1-62. *De hominis dignitate, Heptaplus, De ente et uno e scritti vari*, ed. E. Garin, Firenze, 1942, pp.168-383（羅伊対訳版校訂テクスト）; *On the Dignity of Man, On Being and the One, Heptaplus,* trans. C.G.Wallis, P . J. W. Miller, D. Carmichael, Indianapolis, 1965, pp.65-174（英訳）.

21）ピーコの900の『論題』の中には異端的なものが多く含まれていたので（特に魔術とカバラに関するものに）,『ヘプタプルス』執筆当時まだ『論題』が発禁となっていたことが影響していたものと思われる。cf. Wirszubski, *op. cit*., p.172.

22）Pico, *Opera*, p.1.

23）このことは『セーフェル・イェツィラー』の最初の章に記されている。*Sefer Yetzirah*, 1-2, in Kaplan, *op. cit*., p.22.

24）*Sefer Yetzirah*, 1-5, in *ibid*., p.44. ゲッチェル，前掲書，51頁。

25）Sholem, *op. cit*., pp.210-212.

26）７惑星天，恒星天，原動天，超天界を合わせた10天である。

27）Sholem, *op. cit*., p.18.

28）Yates, *Bruno*, p.92.

29）数秘学と文字シンボリズムについては以下を参照。V. F. Hopper, *Medieval Number Symbolism: Its Sources, Meaning, and Influence on Thought and Expression*, New York, 1938; J. J. Davis, *Biblical Numerology: A Basic Study of the Use of Numbers in the Bible*, Michigan, 1968; C. Butler, *Number Symbolism*, London,1970; J. MacQueen, *Numerology: Theory and Outline History of a Literary Mode*, Edinburgh University Press, 1985; A. Schimmel, *The Mystery of Numbers*, Oxford University Press, 1993; K. Barry, *The Greek Qabalah: Alphabetic Mysticism and Numerology in the Ancient World*, Maine,1999.

30）Pico, *Opera*, p.81. このテーゼは註（10）に挙げた校訂版（Kieszkowski, 1973, p.51）から引用する。" Nisi nomini Abraam litera *H*, id est *he*, addita fuisset, Abraam non generasset."

31）「５」の象徴的意味については，Schimmel, *op. cit.*, pp.105-121を参照。

32）アブラム（Abram）は99歳の時にアブラハム（Abra*h*am）と改名される。『創世記』17－4。

33）cf. Beitchman, *op. cit.*, p.67.

34）訳出に際しては，Pico, *Opera* を底本とし，註20）に挙げたガレンによる伊訳と，カーマイケルによる英訳を参照した。尚，底本には段落分けは一切なされていないが，英訳に従って段落分けを行なった。

35）語順の関係上，和訳は順番通りにはならないが，ラテン語原文はそうなっている。

36）『ヨハネの黙示録』1－8。

37）Pico, *Opera*, pp.60-62.